

図書館通信 — 51 —

1980. 4



ライブラリー・オリエンテーション Library Orientation

日程

- 期 間 4月14日(月)～19日(土)
- 時 間 第1回 11:00～
第2回 13:30～
第3回 15:30～
(但し、土曜日は第1回目のみ)
- 所要時間 毎回30～40分
- 内 容 図書館及び資料の利用法の説明(スライド使用)並びに書庫内案内
- 場 所 視聴覚室

案内

新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。様々な期待をこめて大学の門をくぐられたことと思いますが、私ども図書館関係者一同は、いろいろな本をより多く読むことによって、又図書館を利用することによって、皆さんの学生生活をより豊かなものにしていただきたいと考え、上記のオリエンテーションを計画しておりますので、是非図書館を訪れることをお勧めいたします。

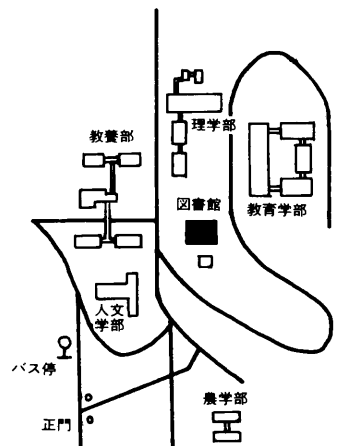
図書館は皆さんが学ぶ教養部から道路ひとつ隔てて、広い階段を登った所にあります。工学部へ進級される方は、進級以後は主に浜松分館を利用することになりますが、他の皆さんは卒業までこの大谷キャンパス内の本館を利用していただくことになります。

皆さんの卒業された高等学校等にも図書館や図書室があったでしょうし、公共図書館を訪れた方もあるかと思いますが、大学図書館は、たぶん利用し始めると、質や量の上で大分異っているのに気付かれることと思います。卒業までの間に何十万冊という図書の中から、是非自分の本を見つけ出して欲しいと心からお願いします。私どもも出来るかぎりの協力をさせていただきますので、いつでも御相談下さい。

現在、本館の蔵書は約41万冊ですが、皆さんが直接利用出来る、新着の新聞・雑誌約140種、参考図書約5千冊、開架・指定図書約5万冊を除く大部分の図書は書庫に納められています。普段は書庫の中には入れませんが、オリエンテーションの期間中は書庫の中も御案内いたします。

もくじ

- Library Orientation …… 1
- 私のすすめたい本・36
 - 洪谷元一(理学部)…… 2
 - 林部敬吉(教養部)…… 2
 - 原秀三郎(人文学部)…… 3
 - 水野卓(農学部)…… 4
 - 山本正(法経短大)…… 4
 - 黒羽清隆(教育学部)…… 5
- 学生購入希望図書…… 6
- 図書館委員会報告…… 6



◆◆私のすすめたい本・36◆◆

読書百遍意自ら通ず

渋谷 元一

ケンタッキー大学かテネシー大学か忘れたが、その図書館の読書室では、天井から吊り下がったすべての電灯の笠に、行書で、読書百遍意自ら通ずと横書きで彫金されていた。この言葉を新入生諸君に贈る。一遍の読書で、内容豊富な書物は理解し得ない。試験前夜に一夜漬けて、ノートや訳本から記憶した知識は、諸君の成長の糧にはならず、社会の役には無論たない。諸君の年頃になれば、記憶力は低下し、神童や才子のおもかげは消え、もはや凡人にすぎない。卒業後の諸君に社会が期待するのも記憶力ではなく、まさに体力・理解力と判断力であり、創造力である。これらの練磨に、読書百遍の努力が必要になる。

戦時中に比べると、比較にならぬ程出版物は多量である。それらの中から読むに値する本、読みたい本を択ぶことは、諸君自体の問題である。図書館・書店・先生・先輩を利用する事はできても、諸君自身が択ばねばなるまい。精読すべき本、乱読する本の分類もせねばなるまい。精読に際しては、節ごと、章ごとのまとめをする習慣がある。不明な点を明白にする習慣がある。文学書でも、再読して新しい内容を発見する喜びがあり、何度も読むうちに愛読書になる。専門書を一読して理解できる人を凡人とは言わない。繰り返して読み、

考え、他の書物を参照して、凡人は理解を深める。辞書の活用に徹底して、原書を頭から翻訳する能力を身に付けてほしい。専門書の場合に、数人で輪読し、三人寄れば必ず師ありという事を体験するのも大切なことかも知れない。

Feynman Lectures on Physics (3巻)*は少し程度が高いが、口語米語に馴れる面もあり、愛読書にしたい書物である。この書物の良さは物理学を専攻し終えた時に判然となるかも知れない。同じく40才を過ぎて愛読書にしたものに、道元禅師の講義録「正法眼蔵」がある。禅の思想に興味をもつ人にはすすめたい書物であり、現在では『日本思想体系12-13』*に「道元」上下2巻として、寺田透先生のゆきとどいた解説の下に読むことができる。

芭蕉・西鶴・漱石・沙翁・ゲーテ・ドストエフスキ・バルザック等を諸君の年頃に乱読した。専門家は同じ書物を精読しているに違いない。最後に数学物理学化学生物学関係の名著を列举する。ポアンカレ著『科学と仮説』*、アインシュタイン・インフェルト共著『物理学はいかに創られたか』*、クルルソン著『化学結合論』*、ダーウィン著『種の起源』*。

読書百遍の実行には相当な覚悟と努力がいる。
(理学部・物理学)

私の推薦する本

林部 敬吉

大学で学ぶことは、一市民としての適正な判断力や批判力を養うことと、専門的な知識を習得することであろう。筆者の専門は心理学である。そこで本欄では、上述の観点から心理学に関連した恰好な書を2冊程紹介したい。

適正な判断力や批判力を培うためには、問題を分析するための広い個別科学の知識を有しているとともに、人間とは何かについての深い洞察が必要であろう。人間とは何かというテーマは哲学をはじめ多くの学問の永遠の課題であるが、またこれは心理学の基本テーマでもある。特に心理学で

は、人間行動のメカニズムを明らかにすることによって人間の本性にせまろうと試みている。

人間行動を解明するためには、人間行動それ自体を分析の対象とすると同時に、サルなどの下等霊長類やネズミなどの下等哺乳類の行動分析も必要となる。それは、人間行動と動物行動の比較照合を通して、人間行動の元型 (geno type) をより一層明瞭な形に浮彫りにさせようとせんがためである。

このような試みの書として、イギリスの著名な動物学者、デズモンド・モリスの『裸のサル』*(河

出書房新社)がある。言うまでもなく、裸のサルとは世界に現存する190余種のサル類のなかでただ一種毛皮におおわれていないサル、すなわちヒトを指している。本書では、人間の基本的行動である、セックス・摂食・育児・探索・闘争・慰安などがとりあげられ、人間行動の動物的側面がその起源にまでさかのぼって徹底的に分析される。本書はかような意味でユニークな人間論となっている。モリスの別の書『人間動物園』* (新潮社)と併読すれば、人間の知られざる側面についての視野が開けるとともに、現代人のおかれた状況がよく理解できることと思う。

さて、個別科学に対して興味を喚起するのも教

師の役割のひとつであろう。そこで、心理学に対して関心を抱いている人に心理学についてのやや専門的な書を紹介したい。それは『心の実験室I、II』* (福村出版)である。本書は、幾人かの日本の心理学者達の手によるもので、各人の専門とする領域での最先端の研究が比較的平易に、しかも興味深く概説されている。その書名の示すように、人間の心のはたらきを明らかにするための巧妙で精緻な実験が数多く紹介されていて、心という眼に見えないものをいかにして科学の土俵にのせようとしているかが良くわかる。

(教養部・心理学)

日本史学の最近の成果から

— 続・歴史学への招待 —

原 秀 三 郎

数年前、私は本誌のもとめにより「歴史学への招待」と題する一文を寄せ、歴史学とくに日本史学をこれから学ぼうと志す諸君へ、基本的な図書を紹介を試みたことがあった。今回は、いわばその続編として、広く新入生諸君が、歴史学を志す与否にかかわらず、歴史の醍醐味を味わいたいと思うならぜひ手にしてみしてほしいと思う著作を、日本史学の最近の成果の中から若干とりあげ、紹介してみたいと思う。

まず時代の古いところから始めると、考古学と文献史学・民俗学を総合して考察を試みた増田精一著『埴輪の古代史』(新潮社)がある。埴輪といえば美術的鑑賞の対象と考えられがちであるが、増田氏は埴輪のもつ意味を探り、それを生みだした社会の風俗・習慣や儀礼の解明を試みている。古代国家の成立をめぐる問題は、70年代の古代史研究の中心課題であったが、鬼頭清明著『律令国家と農民』(塙書房)は、律令国家と農民の関係を、東アジア史の視野から理論的・実証的に解明した意欲的な好著で、とくに高度な内容を平明に叙述している点は大変好感がもてる。

中世史の分野では、近年話題を集めた著書として、網野善彦著『無縁・公界・楽』* (平凡社)がある。「日本中世の自由と平和」という副題をもつこの書の評価をめぐるのは賛否両論があるが、こ

の著作が歴史学の古い殻を打破しようとする大胆で意欲的な試みであることは否定できない。高校日本史でいまひとつはっきりしないものに荘園がある。この不満を解消してくれる手ごろな書物として、永原慶二著『荘園』(評論社)、工藤敬一著『荘園の人々』(教育社)の両書をあげておきたい。

明治維新は近代日本の直接の起点として、またその仕組みの大枠として、特に敗戦以降歴史学の中心課題のひとつであったが、その最近の成果として、芝原拓自著『世界史のなかの明治維新』* (岩波新書)、佐々木潤之介著『世直し』* (同上)、安丸良夫著『神々の明治維新』* (同上)の三書をあげたい。芝原氏は主として政治史から、佐々木氏は階級闘争、特に民衆運動の側面から、そして安丸氏は神仏分離・廃仏毀釈をとりあげ、宗教生活・精神史の側面から明治維新を論じている。いずれの著者もそれぞれの分野で新地平を切り開いてきた第一線の学者達である。味読を期待したい。

なお、ここには比較的低廉で入手しやすいものを取りあげた。自分で購入して読むという習慣も、青年の読書の大事な要件のひとつであることを知ってほしいと思う。

(人文学部・日本史学)

❖ 私のすすめたい本・36 (つづき) ❖

生命のルーツを探る

水 野 卓

生化学の究極目標は、生命の起源を化学的に解き明かすことと、生命の人工合成を可能にすることであろう。特に、生命の起源を探ることは、科学と併せて哲学的思考を要する大命題である。自然科学系は勿論、人文社会系の学徒でも一度はゆっくり読みたくなる本であろう。本学図書館や生協書籍部あたりで入手可能な邦訳書や和書の目ぼしいもの十数冊をご紹介します。

1936年「生命の起原」がA. I. Oparin (ソ連) によって書かれてから既に40余年を経過した。この間に、生命の起原研究の国際学会 (ISSOL) も発足し、1977年には日本で第2回ISSOLが開催された。これら学会の成果を盛り込んで、オパーリンは「生命の起原」の新版を次々に発刊して来た。A. I. Oparin 著、東大ソ医研訳『生命の起原』* (岩崎書店1956)、A. I. Oparin 著、江上不二夫編『生命の起原と生化学』 (岩波書店1956)、A. I. Oparin, J. D. Barnal 他著、近藤洋一他編『生命の起原』 (みすず書房1957)、A. I. Oparin 著、石本眞訳『生命——その本質、起原、発展——』* (岩波書店1962)、A. I. Oparin 著、石本眞訳『生命の起原』* (岩波書店1969) などである。オパーリン以外の「生命の起原」書としては、J. D. Barnal 著、山口清三郎他訳『生命の起原』——その物理的基礎——* (岩波書店1952)、J. Keosian 著、原田馨訳『生命の起原』 (共立出版1969)、S. L. Miller, L. E. Orgel 共著、野田春彦訳『生命の起原』* (培風館1975) などがあり、日本人著者の近刊書として原田馨著『生命の起原——化学進化からのアプ

ローチ——』* (東大出版会1977) は多くの示唆を与えてくれる。近年は、宇宙や地球の誕生に始まり、元素→気体有機物→低分子生体成分→高分子→コアセルベート→細胞→生命発生の順序で解き明かして行こうとする化学進化や分子生物学あるいは生命科学の立場から生命の起原を探ろうとする研究成果が蓄積されつつある。これらを纏めたのがM. Calvin 著、江上不二夫他訳『化学進化——宇宙における生命の起原への分子進化——』* (東京化学同人1970)、原田馨著『化学進化——生命の起原の化学的基礎——』* (共立出版1971)、T. N. Evrelnova 著、湯浅精二他訳『コアセルベート』 (共立出版1974) などである。生命の起原を宇宙レベルで思考する場合、小沼直樹著『宇宙化学——コンドライトから見た原始太陽系——』* (講談社1972) が役立つ。また、生細胞を物理的側面から理解しようとしているE. Schrödinger 著、岡小天訳『生命とは何か』* (岩波書店1951)、地球生命から宇宙生命までを、化石、分子生物学、生化学の記録から把握しようとするL. E. Orgel 著、長野敬他訳『生命の起源と発展』* (共立出版1974)、生化学、分子生物学、生命科学の立場からの新しい解説書江上不二夫著『生命を探る、第二版』* (岩波書店1980) などの併読をお勧めする。それに第2回ISSOL (京都) をモノグラフとして纏めたH. Noda 編『Origin of Life』* (学会出版センター1978) には最新の知見が多数掲載されており読みごたえがある。

(農学部・生物化学)

はじめて経済学を学ぶ学生諸君へ

山 本 正

現代の経済学は、マルクス経済学と「近代経済学」の二大潮流に分れ、さらにそれぞれが多数の分流に分れており、また別の観点よりすると資本主義を分析の対象とするものと社会主義を分析の対象とするものに分れている。その分析手法としては、きわめて抽象的・論理的なものから、高度

の数理を用いる技術的色彩のこいものに至る、さまざまな手法が使用されている。かくして現代の経済学は非常に複雑なものになっている。このような複雑な科学をこれから学ぼうとする諸君は、まず最初に基礎的・原理的なものを身につけておくことが必要と思われる。

このような見地から、初学者にとって適当と思われる書物を若干思いつくままに掲げてみよう。

- アダム・スミス『諸国民の富』* (または『国富論』)、(岩波文庫その他)。経済学における古典中の古典。しかし専門に入ると読む機会がえって少なくなるとされる。大部のものであるが、始めから読みはじめ興味のわく所だけ読んでいっても有益と思う。経済についての基本的感覚が養われる。
- 河上肇『資本論入門』* (青木文庫、全5冊、その他)。『資本論』*第1巻のくわしい入門書。『資本論』に親しみを感じさせる。ついでながら、『資本論』は、在学中にせめてその第1巻だけでも現物で——解説書ですませるのではなくて——読んでおくことが必要と思う。
- 野呂栄太郎『日本資本主義発達史』* (岩波文庫、

その他)。『資本論』の理論をわが国の歴史にあてはめたもの。理論をいかに現実分析に用うるかを示す一つの典型。筆者の学生時代には、発禁になっていて、読みたくても現物を見ることのできなかつた本の一つ。

- 杉本栄一『近代経済学の解明』* (理論社)。著者はマルクス経済学と「近代経済学」との間の切磋琢磨を提唱したが、その立場から「近代経済学」の諸潮流が広い視野のもとにわかりやすく説かれている。
- その他、ヒューバーマン『資本主義経済の歩み』*上、下、大塚久雄『社会科学の方法』*、内田義彦『資本論の世界』* (以上いずれも岩波新書)等は容易に読めるよい本と思う。

(法経短期大学部、経済学・統計学)

民衆文化論の一秀作

— 坪井洋文『イモと日本人 民俗文化論の課題』をすすめる —

黒羽清隆

(1) 日本のジャーナリズムでは、ときどき、「日本人論」というテーマがはやることがある。

私は、生来? 歴史家気質のもち主であるせいか、ナントカ性とかカントカ性とかいう抽象概念をきらびやかにならべた「日本人論」を好まないし、あまり信用しない。桑原武夫氏流にいうなら、「手持のカード」のお粗末さが、カッコいい論断のうしろにすけてみえるからである。

(2) そうした日ごろの考え方からいって、私は、亡き柳田国男さんの「日本人論」——国民俗学という学的体系に裏打ちされた日本文化論——を信愛し、尊敬している。無告の民の生活文化——柳田さん自身の用語でいえば、「常民」のカルチャー——について、柳田さんの「手持のカード」は、十数万枚あるという。十数万枚のカード(つまり、データ)からの抽象作業としてあるからこそ、柳田民俗学は、あらゆる学問領域における「日本人論」にのみりゆたかな示唆をあたえつつけてきたのである。

(3) その柳田民俗学が後進世代に手渡したバトンをにぎって、一所懸命に力走する多くのランナーがいる。いま、ここにご紹介する坪井洋文氏もそ

のひとりであろう。そして、坪井氏の新著『イモと日本人 民俗文化論の課題』(1979年・未来社・291ページ)は、サトイモの生活文化を掘りおこすことを通じて、きだ・みのる氏のいわゆる「日本文化の根底にひそむもの」を明らかにした秀作である。

(4) 坪井氏はここで、柳田さんや折口信夫氏の仕事をうけつぎつつ、「日本の民俗をすべて一元的に稲作文化を母胎として発展した現象としてとらえる方法」いわば一種の稲作文化一元論に対して、批判を加える。その批判の一軸となっているのは、例の「餅なし正月」(正月に餅を食べることをタブーとする村落の存在)の民俗で、そこから坪井氏はゆたかなカードを駆使して、サトイモを「ハレの日」(聖なる日)の食物として志向する——サトイモに特別な靈力があるとみる——共通感覚フモン・センスをあざやかにとりだす。私も以前から沖繩の島々を歩いて、サトイモ・タイモ文化の重要性に気付いていたので、坪井氏の論証はきわめて魅惑的だった。手づくりの学問創造の苦しさと楽しさがこの本にはフンダンにある。「世の若く新しき人々」のご一読をおすすめする。

(教育部・歴史学)

■学生購入希望図書

5階閲覧室には、皆さんの学習や教養のための図書が現在約5万冊備え付けられ、毎年約4千冊の新刊図書が追加されます。古くなり、あまり利用されない図書は順次書庫に納められます。これらの図書は図書館関係者によって選択されますが、予算、収書基準の許す範囲内でできるだけ皆さんの希望にそいたいと考えておりますのでお申し込み下さい。以下のリストは昨年度学生から希望があり購入した図書の一部です。

- 【被爆者(写真集)】 森下一徹著 森下一徹写真事務所 (369.37/Mo 65)
- 【宗教と民俗】 原田敏明著 東海大学出版会 (161/H32)
- 【新アサヒカメラ教室 1-6】 朝日新聞社 (740.8/A82)
- 【自由経済の思想】 岡田与好著 東京大学出版会 (331/O 38)
- 【債権各論講義 第5版】 広中俊雄著 有斐閣 (324.5/H71)
- 【生物をどう教えるか】 黒田弘行著 新生出版 (375.4/Ku 72)
- 【基礎電子回路 I アナログ編】 柳沢健著 丸善 (549.1/Y52/1)
- 【シェイクスピアの祝祭喜劇】 シーザー・L・バーバー著 白水社 (932/Sh 12 B)
- 【数学学習の基本概念 小学校編】 小高俊夫著 東洋館出版社 (375.4/O17)
- 【男女共学 技術・家庭科の実践】 産業教育研究連盟編者 民衆社 (375.5/Sa 63)
- 【王朝美的語詞の研究】 犬塚且著 笠間書院 (810.23/I 59)
- 【NHKスペイン語入門】 山田善郎著 (860.7/Y19)
- 【チリの民話】 R. A. ラバル著 新世界社 (388.69/L38)
- 【ブラジルの民話—北東部編—】 L. C. カスクード著 新世界社 (388.69/L 25)
- 【ブラジル文学短篇集】 ディナー・S・ケイロス、レナール・ペレス 新世界社 (969/Q 3)
- 【物語戦後文学史】 本多秋五著 新潮社 (910.26/H84)
- 【治安維持法と特高警察】 松尾洋著 教育社 (326.81/Ma 85)
- 【遙かなるボストン】 小西章子著 鎌兼書房 (367.253/Ko 75)
- 【全宇宙誌】 松岡正剛他編 工作舎 (440/Ma 86)
- 【共同体の論理】 松本健一著 第三文明社 (361.4/Ma 81)
- 【生物化学研究法】 D. Freifelder 著 東京化学同人 (464/F46)
- 【子午線の祀り】 木下順二著 河出書房新社 (912.6/Ki 46)
- 【道化】 イーニッド・ウェルズフォード著 晶文社 (772.3/W57)
- 【あの時、世界は……磯村尚徳戦後史の旅 1-3】 NHK取材班 (209.6/N77/1-3)
- 【生体膜におけるエネルギー変換】 E. Racker 著 共立出版 (464/R11)
- 【イギリス初期労働立法の歴史の展開 増補版】 岡田与好著 御茶の水書房 (366.1/O38)

- 【精神分析の破綻】 ハリー・K・ウェルズ著 みすず書房 (134.834/C25)
- 【虫づくし】 別役実著 烏書房 (914.6/B39)
- 【フランス語24講】 斎藤一寛著 第一書房 (850.7/Sa 85)
- 【圏論】 大熊正著 槇書店 (412.6/O 55)
- 【杜甫の研究】 黒川洋一著 創文社 (921.4/To 11 K)

■図書館委員会報告

昭和54年度第6回 S. 54. 11. 20

- (1) 自然科学系外国雑誌の集中化が本年度に一部進展すれば、本年度の本省の交付額が復活出来る目途がついたので、東部地区では、その方向で検討することとした。本省の予算の配付があった場合には、集中化の程度に応じて割振の方針を了承した。
- (2) 本館の開館時間の延長に伴う図書館閲覧規程の一部改正(案)を承認した。
- (3) 学生用図書購入費の学内充当額を増額することについて、種々審議の結果、各部局に持ち帰り検討することとした。
- (4) 昭和54年度図書資料(大型コレクション)の内「国際連盟関係書類」の予算の内定があった。

昭和54年度第7回 S. 54. 12. 4

- (1) 外国雑誌の集中化・共同利用については、東部地区において、本年度内に部分的に実現を図る方向で、又西部地区においては化学系を中心に来年度に実施の計画を検討することとした。本省に前記計画を申し出た結果、前年度と同額の予算の配分があった旨の報告があった。
- (2) 学内負担の学生用図書購入費の増額の問題について、種々審議の結果、研究費購入分から学生用に共用する分を振替計上する方法等について今後検討することとした。

昭和54年度第8回 S. 55. 1. 28

- (1) 来年度の光熱費等の値上げに伴う運営費の増額の問題、学内負担による学生用図書購入費の増額等を種々審議し、次回において予算の編集方針を資料により検討することとした。
- (2) 外国雑誌の集中化・共同利用の問題の東西別の進捗状況について委員から報告があり、その具体化についてなお協議することとした。
- (3) 指定図書制度を資料に基づいて実施したい旨の提案があり、来年度も本年度と同様に実施することで承認された。